2024年『書林揚觶』現代語訳

凡(およソ)a著(あらはシ)レ書立(ヲツルハ)レ論(ヲ)、

必本(ズもとづク)二於不(ずシテ)レ得(え)レ已(やむヲ)而有(ルニ)一レ言(げん)。

一般的に、本を書き、論を展開するには、必ず言わざるをえない自説に依拠する（べきだ）。

而後其言当(しかルニノタリ)、其言信(ノまことニシテ)、其言有(ノリ)レ用。

そうやってはじめて、その言葉は妥当となり、その言葉は誠実となり、その言葉は用いる価値がある（ようになる）。

故(ゆゑニ)君子之言(の)、達(シテ)二事理(じりニ)一而止(やミ)、

不レ為(なサ)三敷衍流宕(ふえんりうたう)、放言高論(シ)、b取(ルヲ)二快(かいヲ)一時(ニ)一。

そういうわけで、君子の言葉は物事の真理にまで到達してやめており、節度なく述べ立てたり、無責任に言い放ったり、好き放題に空論を述べたりして、一時的に快楽を得ることをなどしない。

蓋(けだシ)非(ザレバ)レ要(ようニスナはチベク)則(いとフ)可(レバ)レ厭(ナラ)、不(レバ)レ確(チベシ)則可(フ)レ疑。

思うに、重要でなければ嫌って避けるべきで、（根拠が）不確かであれば疑うべきだ。

既厭(ニいとヒ)且疑(ッヘバ)、而其(ノ)書不(レ)可(ベカラ)二貴信(ビズ)一矣。

嫌っている上に、さらに疑っていれば、その本は尊重して信じること（など）できない。

東大合格 オンライン 敬天塾

君子之言、如(ごとク)二c寒暑昼夜、布帛菽粟(ふはくしゅうぞくノ)一、
無レ可(キフ)レ疑、無レ可(シキフ)レ厭。

君子の言葉は、寒い（日）や暑い（日）、昼や夜（が来ることや）、
日常の衣服や食物のように、（当たり前に受け入れられ）
（誰も）疑うはずはなく、嫌って避けるはずもない。

天下万世信(ジテ)而用(もちヰ)レ之、
有(リテ)二d丘山之利(きうざんのり)一、無(シ)二毫末之損(がうまつ)一。

天下の万民は信じてこれ（＝君子の言葉）を利用し、
丘や山のように大きな利益が得られ、ほんのわずかも損害は被らない。

以(テ)レ此(これヲみレバ)観(こんノ)二古今(ヲ)作者一、昭然(しょうぜんトシテごとシ)若(ノ)二白黒一矣。

この点で昔と今の文筆家について考えると、（差は）明らかで、
白黒のよう（にはっきりと異なる）。

著(あらはスニ)レ書(ヲ)不(もとヅケレバ)レ本(これヲ)二諸身一、
則(すなはチたダこレひさグ)只是鬻(ノヲ)二其言一者(ものナルのみ)耳。

本を書くにあたって、内容が自分（の考え）に依拠しなければ、
その著者はたんに（他人の）言葉を（勝手に借用して）売る者にすぎない。

老荘申韓之徒、学術e雖(いへどモ)レ偏(へんナリト)、

道家や法家の学徒は、学問は偏重しているとはいえ、

ハおのおのよクみづかラあらはル
要各能自見二於天下後世一。

（その学問の）要点はそれぞれ、自分で世の中の後世にも残せている。

こノぎや　いにしへノしハなホよクブ　ニ
斯義也、古文章之士猶能及レ之。

この意味では、昔の文筆家は今でもこれ（＝現在の学問）に（自分の文章を）残すことができている。

くだリテ　シテ　よクセすなはチへうぞくセリ
降而不レ能乃剽賊矣。

時代が下って（現在）、それができなくて、なんと（他人の文章を）盗用する（者がいる）。

そレ　シテ　テつくルスラ　ヲ　かツ　ラ　テ　フルニ　ニ
夫剽賊以為レ文、且不レ足二以伝一レ後、

しかルニいはンヤ　シテ　テ　スヲヤ　ヲ
而況剽賊以著レ書邪。

そもそも、盗用して文章を作ったのでさえ、後世に伝えるには値しない。まして盗用して書いた本ならなおさら（後世に伝えるに）値しない。

しかリしかうシテ　ル　ものつねニ　ム　キヲ　や
然而有レ識者恒病二書之多一也、

あニざランヤ　よラ　ニ
豈不レ由レ此也哉。

そうして、見識のある者が常に、本が多いことを気に病むのは、これが理由だ。